

伯耆大山北壁～第3回雪山講習会（後発組）～

【報告者】I藤、N本、A屋

【日時】2016年3月20-21日 【天候】晴れ時々曇り

【参加者】A屋（L）、I藤、N本

《コースタイム》

20日 弥山尾根西陵 6:45 南光河原駐車場ー7:30 元谷（テント設営）30分～9:10 弥山西陵取り付き～11:10 弥山山頂～7号沢下降～12:15 雪訓～13:30 元谷

21日 8号尾根 5:50 元谷～6:50 8号尾根取り付き～9:45 頂上稜線～11:00 元谷（テント撤収）～13:00 南光河原駐車場

《 報 告 》

＜1日目報告：I藤＞

今季は期待する程積雪もなく、北壁ライブカメラでも尾根の下部は岩で露出していることも知った。またさらに前日の雨天により、湿性雪崩や落石のリスクも加えて、自分の雪稜歩きに余裕が持てるようになりたいとあらゆるコンディションとの葛藤を感じながら参加した。

そんなこんなで現場に到着した。北壁の概念図を記憶に残し、弥山尾根はいったいどれなのか？取り付きはどこなのか？チームで位置の確認をした。事前に情報収集もしていた。しかし、これといった特徴も目視では捉えられず、トレースもあったが、A屋さんの経験と意見を頼りにスタートした。

小屋の左側の沢沿いの雪斜面を歩き、取り付きと思われる大きな尾根を目前にすると心拍数が上がって、思わず引き返そうと臆病な気持ちになってしまった。

A屋さん、N本さん、自分は最後という順序で納得し、ランニングコンテで開始した。

何か所かブッシュが出て来る場面では、ザックやロープが絡み合い、時間が取られることに正直、嫌気が差しながら登った。また雪斜面では、スピーディーだと感じつつ、セカンドにテンションが掛からないよう必死に登攀した。

核心部と思われるガレ場のような狭い岩場では、関西チームと合流してしまった。私が落石しないよう、三点支持に考慮し、挨拶を通じお互いが非常に気を使ったことは直感で分かった。

このバリエーションを早く抜け出したい、稜線に上がりたい気持ちで一心となった。

メンバーのランニングコンテが効率よく機能したおかげで、短時間で稜線に上がったことは、思いの外、大変嬉しかった。また稜線や弥山山頂では空も青く、太陽が照

り、見上げると眩しく、多くの登山客で賑わっていた。思わず私も緊張が解れて、無事に終えたことで、次第に安堵の気持ちが溢れてきた。

ありきたりなまとめですが、今回メンバーが短時間で終了出来たことは、ルートを詳細に解析すれば、迅速性も増し、登攀力に良い影響が現われたものだと考えます。(当然、雪質によっても、所要時間は変わってくると思います。)

私は、今後もまだ技術的体力的にも沢山学ぶことがありますが、いつかはリードやセカンドとして自信をつけていきたいと思いました。A 屋さん、N 本さん、有意義な山行をどうもありがとうございました。



< 2日目報告 : N本 >

4時起床

6時発 デブリの跡もあり小屋から行者尾根寄りの谷沢の右岸を詰める。別山主稜に迷い込む前に谷へ下る。200mほど谷を歩き、そのまま右俣へはいると取り付き。(6:45) 自分がトップでA 屋さん I 藤さんの順で基本ランニングコンテで最後まで上がる

まずは雪稜を左上し (ここの傾斜が一番恐怖感あった気が) 樹林帯の間を抜ける。その後右上しリッジへでるのだがリッジ付近は岩が露出。リッジ手前はプロテクションが取るところもなかったため少し緊張しながらボロボロの砂利傾斜を上がる。後続の A 屋さんに巻き道を指示。結果ロープが木にスタック **A**。A さんがリッジまで登ったところでアックスビレイをしてもらいながら 4m ほどクライムダウンしてスタックを外す。ロープのケアを忘れていたことを反省。コンテニュアスなので人が近くな

るとどうしてもロープの絡みが出てくる。

さらに、その後リッジの右側をトラバース気味に登っていく。リッジには樹が多い、一か所 2m くらいの岩壁を上がる場所があった **B**。その後はひたすらリッジに上がったたり右側をトラバースしたりで上がっていく。リッジ沿いに明らかな岩峰が見えたが **C** 根元付近は岩が露出しすぎて危険と判断し近寄りすぎずに谷を右にトラバースして少し樹林帯を無理矢理抜ける。谷に降りて上がるトラバースのためロープが張っているとセカンドが降りられないため余長が必要でした。尾根に樹林、谷には雪稜になっており、谷を 3 つほどトラバース気味に上がるとリッジに出ることができる **D**。最後は樹林帯に突っ込むと思いのほか楽に終了点に到着 (9:45 終了)

<所感>

やっぱ雪稜登はん楽しいです。快適な雪の状態でした。(午前中のみ)

高校の頃、部活のトレーニングで坂道で踵をつけずに走っていたのと、ちっちゃいころ四足歩行で家の階段を登っていた感覚が呼び起こされました。笑

今回は 50m ロープを 25m 間隔で 3 人を繋いだが、場所によってはコミュニケーションも取りづらく落ちる距離も長くなるのもう少し短い間隔でパーティを繋いでも良いかなと思った。どちらもリスクはあると思いますが。

I 藤さんのご飯の準備の良さに感動でした。A 屋リーダーの的確な指示素敵でした。おそろしく準備撤収の早いパーティでスムーズな山行でした。



図 8号尾根ルート



図 ロープスタック地点

<総括：A屋>

都合により 2 日間だけ参加可能なメンバーで後発組を組み、大山北壁での雪稜登攀講習を実施した。春の陽気で雪が急速に溶け落ち、また自分が風邪で直前まで寝込んでおり、果たして後発組は出発できるのか？行ったところで雪はあるのか？など不確定要素を多く抱えて大山へと向かった。元谷から見上げた北壁は、黒々とした岩壁とフサフサしたブッシュが目立っており、登攀の対象では無いように見えた。途中撤退戦略もイメージしながらとりあえず弥山西陵の取り付きまで行くと、かろうじて登攀ラインに沿って雪がついていた。北アルプス残雪期のようなクラストした雪にアイゼンがカッチリ決まり、むしろ新雪より登りやすい。取り付きからランニングコンテで登る事を決めた。先発隊は、はす向かいの別山「幻のコンテ」ルートに取り付いているのが見えた。なぜ難しいルートに取り付いているのだろうか？と不思議に思いつつ、「お気をつけて！」とコールする。

弥山尾根の登攀そのものは極めて快適で、バッチリ効くピッケルとアイゼンでグイグイ安心して高度を稼ぐ。過剰な安心感からランナーをあえて飛ばし気味に設置していると、セカンドの N 本君を心配させてしまったようだ。ここは反省点。弥山山頂では最高の眺めが出迎えてくれた。

元谷への下降中の斜面（7号沢）でアンカー設置とスタンディングアックスビレイの練習を行った。時間に余裕があったのでビーコン講習も行えばよかった。

2 日目の 8 号尾根は、初めての登攀だったのでアプローチでは雪崩安全性とルートミスによるタイムロス防止にも留意した。ルートそのものは前日の弥山尾根よりやや

難度があがり、テクニカルな動作が求められた。圧倒的雪の少なさによる露出した岩稜の登攀、リッジを覆う藪のトラバース回避などコンディションに合わせた対応が体験できてよかったと思う。オールリードの延本君は安定した登攀を見せてくれた。雪が多い時の記録と全く状況が異なる藪リッジ群をどうクリアしていくか試行錯誤したが、結果として最も無駄のないラインが引けたと思う。爽快感のある登攀だった。

全体として今回はアルパインクライミングとしての時間を意識した行動ができたと思う。歩行速度で30分の時間短縮をするには相当な体力トレーニングが必要だが、出発準備の段取りと取り付きへの最短アプローチにより30分から1時間の時間短縮は、比較的容易に図れる。メンバーには意識を持つよう多少話をしただけだったが、ムダな時間の無い準備ができて驚いた。行動が早く終わった分、稜線景色を楽しんだり、リッチな鍋料理を囲んでくつろいだり、ベースキャンプで北壁を見上げながらティータイムや写真撮影を楽しむなど、メリハリのある素敵な山時間の過ごし方をする仲間だった。



左図 弥山尾根西陵終了 右図 8号尾根リッジのブッシュ回避